

『マハーバスツ』¹「燃燈佛事記」試訳（一）

福井 設 了

〔193〕 燃燈仏事記の初め。

大目犍連よ！ 今から無量無数劫の昔、アルチマツトという名の王が居た。
（王は）世界を支配する転輪聖王で、前世に於て善行をなし、偉大な主と言われ、七宝を所有し、²四洲を統治し、（王に）忠誠な³都市と地方の民を有し、俱法有道の王（であって）、⁴十善業道の戒を持っていた。王の七宝は即ち、輪宝象宝、馬宝、摩尼宝、女宝、⁵長者宝と臣宝というこのような七宝であった。⁶王には、千人に満ちる息子たちが居り、（彼等は）勇武で、勇敢で、最も美しい身肢相好を有し、敵軍を粉碎するものな⁷あであった。王は大海と山に囲まれたこの四大洲を完全に、かつ、安穩に統べ、刑を措いて用いず、兵刃を用いず、抑圧せず、法によってこれら（四洲）を統治していた。

〔194〕 さて、大目犍連よ！ ⁸アルチマツト王には、⁹ディーパバティーと言う名の王都があった。（その都は）東西の長さ、十二ヨージャナ、南北の幅七ヨージャナで、金製の、また金で覆われた七つの塁壁で囲まれていた。かくて、また、大目犍連よ！ ディーパバティーの王都は、七つの宝物（即ち）金、銀、真珠、瑠璃、水晶、¹⁰碑こ、紅玉をもつ明色の美しい七列のしゅろの並樹に囲まれていた。

¹¹金のしゅろの幹には、銀の葉（がつき）、果実がなり、
銀のしゅろの幹には、真珠の葉（がつき）、果実がなり、
真珠のしゅろの幹には、瑠璃の葉（がつき）、果実がなり、
瑠璃のしゅろの幹には、水晶の葉（がつき）、果実がなり、
水晶のしゅろの幹には、碑この葉（がつき）、果実がなり、
碑このしゅろの幹には、紅玉の葉（がつき）、果実がなり、
紅玉のしゅろの幹には、真珠の葉（がつき）、果実がなっていた。

かくて、又、大目犍連よ！ これらのしゅろの樹に風が吹き、微風がそよぐ

とき、音が出て美しく、楽しく、快く、心をひきつけるもので、耳に逆らわず
 聞いて心地よいものであった。そのさまは、あたかも巧妙な演奏者によって
 （奏でられる）五種の楽器がまさしく、絶妙な調べの音色を出している（さま
 にも似て）美しく、楽しく、快く、心をひきつけるもので、耳に逆らわず、聞
 いて心地よいものであった。¹²まさに、このように、これらのしゅろの樹に風が
 吹き、微風がそよぐとき、おお、大目犍連よ！ かの時期、あの時に、ディー
 パバティーの王都では、人びとはかのしゅろの葉の音色に酔わんことを希い、
 五感の快適な楽しみに満ちており、整っており、（人びとは）遊び、戯れ、¹⁴そ
 ぞろ歩きを楽しんでいた。さて、また、大目犍連よ！ ディーパバティーの王
 都は、¹⁵七宝、即ち、金、銀、真珠、瑠璃、水晶、磤こ、紅玉の明色の美しい七
 つの欄干に囲まれていた。

（欄干の）¹⁵支柱が金のところは、¹⁵横木〔195〕¹⁵横棧、¹⁵基礎は銀製であった。

（欄杆の）支柱が銀製のところは、横木、横棧、基礎は真珠造りであった。

（欄杆の支柱が）真珠造りのところは、（横木、横棧、基礎は）瑠璃造り
 （であった。）

（欄杆の支柱が）瑠璃造りのところは、（横木、横棧、基礎は）水晶造り（で
 あった。）

（欄杆の支柱が）水晶造りのところは、（横木、横棧、基礎は）磤こ造り
 （であった。）

（欄杆の支柱が）磤こ造りのところは、（横木、横棧、基礎は）紅玉造り
 （であった。）

（欄杆の）支柱が紅玉造りのところは、横木、横棧、基礎は金製であった。

かくて、また、大目犍連よ！ これらの欄杆は二つの¹⁵金網でおおわれてい
 た。一つは金製、もう一つは銀製の（であった）。金の金網には銀製の鈴が
 （ついて）あった。銀製の金網には金製の鈴が（ついて）あった。そして、ま
 た、ディーパバティーの王都には、四面に（それぞれ）三つの門があり、明色
 の美しい門で、七宝（即ち）金、銀、真珠、瑠璃、水晶、磤こ、紅玉で造られ
 ていた。

さて、また、大目犍連よ！ かの諸門には二種の¹⁵奥行一ひろの出しかけがあ

った。一つは金製、他は銀製であった。（かの諸門には）二種の樑があった。一つは金製、他は銀製であった。（かの諸門には）二種の望楼¹⁵があった。一つは金製、他は銀製であった。（かの諸門には）二種の門¹⁵がついた厚板があった。一つは金製、他は銀製であった。（かの諸門には）板が張られてあった。一つは金製、他は銀製であった。（かの諸門には）金、銀、真珠、瑠璃製の四種の飾り¹⁵があった。

かくて、また、大目鍵連よ！ （かの諸）門には、二種の敷居¹⁵があった。一つは金製、他は銀製であった。また、大目鍵連よ！ 門前には、金、銀、真珠、瑠璃製の四種の門柱があった。（また）金製、銀製の二種の扉があった。（また）金製、銀製の二種の門の鎖があった。

〔196〕さて、大目鍵連よ！ 諸門の前には、柱¹⁶が建てられてあった。深さ三身長、¹⁷周囲三身長、高さ十二身長であった。（それらは）明色で、美しく、七宝（即ち）金、銀、真珠、瑠璃、水晶、碑こ、紅玉で造られていた。

また、大目鍵連よ！ これらの門は、二つの金網でおおわれていた。金製の網、銀製の網で。金製の網には、銀造りの鈴があった。銀造りの網には、金製の鈴がついていた。

さて、また、大目鍵連よ！ これらの金網に風が吹き、微風がそよぐとき、音が出て美しく、楽しく、心をひきつけるもので、聞いて心地よいものであった。¹⁸あたかも、五種の楽器のように、実に、大目鍵連よ！ 風がそよぐとき、音が出て美しく、楽しく、心をひきつけるもので、聞いて心地よいものであった。

かくて、また、おお、大目鍵連よ！ ディーパパティーのこの王都は、このようなものの音、¹⁹つまり、象の叫び声、戦車の音、戦士の隊伍の物音、太鼓、小太鼓、腰鼓、螺貝、横笛、琵琶、歌声、楽器などの音、（また）「食べなさい」「すっかり食べなさい」「飲みなさい」「施物を贈りなさい」「功德をつみなさい」「法にもとづいて振舞いなさい」「沙門・バラモン僧²⁰を歓待して下さい」という呼び声などで満ちみちていた。また、ディーパパティーの王都の

都心では、²¹バルグヤーという名の旗竿があった。それは七色（つまり）、金、銀、真珠、瑠璃、水晶、碑こ、紅玉で、²²できていて明色で、美しく、高さ十二
 ヨージャナ、地中の深さ四ヨージャナであった。

かくて、また、大目犍連よ！ アルチマツト王には、スディーパーという名の妃がいた。（彼女）は美しく、みめよく、²³上品な、（かつ）美しい優雅な色の蓮華のような容色をそなえていた。

大目犍連よ！ 十二年経つと、ディーパンカラ菩薩は、トソツ天宮より下生されるであろう。〔197〕浄居天たちは、縁覚たちに宣言される。「菩薩が下生されようとしている。（汝らは）²⁴仏土を立ち去れ」と

1. トソツ天宮より無量の智慧の視力ある方が下生されようとしている。
 汝らは仏土を立ち去れ！ 最勝の相をお持ちのかたの²⁵下生にあたって。
2. この偉大な神がみ（浄居天たち²⁷）の仏という声を聞いて、縁覚たちは心解脱し、無師知となり、心自在となり、涅槃に入った。

「大目犍連よ！ 十二年経てば、ディーパンカラ菩薩は、トソツ天宮から下生されるであろう。」浄居天たちは、外形をバラモンにやつし、呪文とベータと大丈夫の三十二相（及び）「菩薩がこの世に現身されたとき、授記されるであろう。」とバラモン達に説かれた。

さて、大目犍連よ！ かくて菩薩は下生のときにあたって、トソツ天宮より四大観察をなされた。即ち（下生すべき）時期、地方、洲、家族についての観察であった。

大目犍連よ！ 菩薩衆は二つの家族、即ちクジャトリヤ階級か、バラモン階級の家族に生れる（のである。）

大目犍連よ！ 菩薩衆が生れる家族は六十種の支分を具えている。如何なる六十種の支分を具えているのか？

密
教
文
化

大目犍連よ！ 1. その家族は著名であること。2. その家族は遍く知られていること。3. その家族は微賤ではないこと。4. 高貴の家の出身であること。5. 種姓が真正であること。6. 先祖が（長く）続いていること。7. 名のある先祖があること。8. 力のある先祖があること。9. 女性に恵まれていること。10. 男性に恵まれていること。11. 貪欲でないこと。12. 強欲でないこと。13. 畏れることがないこと。14. 下品でないこと。15. 賢明であること。16. 高潔であること。17. 家人に瞻仰されること。18. その家族の財を有効に使うこと。19. その家族は（みな）友情に堅いこと。20. 恩義に感ずること。21. きまりを守ること。22. 好みに（まかせて）勝手な振舞いをしないこと。23. 過った振舞いをしないこと。〔198〕24. 迷妄によって行動しないこと。25. 恐怖によって行動しないこと。26. 廉恥心あること。27. 施しものをよくすること。28. 男らしい心を持っていること。29. 剛毅であること。30. 仏塔を供養すること。31. 諸天を供養すること。32. 先祖を供養すること。33. 仕事に熱心であること。34. 布施に熱心であること。35. 宗教儀式に熱心であること。36. 家族の先祖と後裔が続いていること。37. 諸天のなかで名声が喧伝されていること。38. 族のなかで長老家族であること。39. 族のなかで最勝家族であること。40. 族のなかで卓越した家族であること。41. 族を支配していること。42. 偉大な主と称せられていること。43. 大眷属を有していること。44. 倦むことの無い眷属を有していること。45. 熱心な眷属を有していること。46. 忠誠な眷属を有していること。47. 母を敬うこと。48. 父を敬うこと。48. 沙門を敬うこと。50. バラモンを敬うこと。51. 族の長老家族を敬うこと。52. 豊かな財宝を有していること。53. 多くの倉庫を有していること。54. 多くの象、馬、牛、羊を有していること。55. 多くの男女の奴隸と召使いを有していること。56. その家族は他人や敵や敵対者によって攻撃され難いこと。

大目犍連よ！ 諸菩薩が出生される家族には、これら六十種の支分が具わっているのである。そのような家族に恵まれている有情は大悲を得るのである。

かくて、大目犍連よ！ 菩薩が下生の時には、大きな準備をされるのであ

る。幾千の天神に向って、ある天神が言った。「十六の大地方に、中部地方に出生されよ！ クシャトリヤ階級の（人の）大きな館に、（また）族の家長の大きな館に、（また）王族に、（また）大臣の族に。御身らが教化されたとき大衆は正法律に近づくであろう。」

菩薩は下生の時にあたって、「私はどこへ出生すべきか」を照覧するのである。「このアルチマツト王は前世に於て善行をつみ、強力で、世界の王（＝転輪聖王）であり、四大洲の王である。この人は私の父たるに価する。」〔199〕
（かの菩薩は）慈悲深く、出身もよく、身体に汚れなく、感情は温和で、短命で、すなわち彼女の余命は十カ月と七夜が残されているという（ような）母（たべき女性）を探した。

3. 諸菩薩の母たちは、最勝の方を生んで
その七日間の最後の日に、命を断つ。
4. 一切智（をそなえた方の）母たちが、最勝の方を生んで、
疾く命を断つ理由は何なのか？
5. トソツ天におわす時に菩薩は、おおいに思念されるのである。
浄業（があったかどうか）を吟味して、（そのような）母を得たいものだ。
6. （菩薩は）余命が十カ月と七日残っている。
³⁰ 婦人の胎に下生するものなのであるから。
7. そのいわれは何か？ 私のような比べようのない（素晴らしい）者を
身ごもっていながら、後日、愛欲にふけることはふさわしくない。
8. もし善逝³¹の母が愛欲にふけるなら
³² 王はふしだらな生活をしていると天衆に言われよう。

9. 世尊は常に愛欲の罪過について語られている。

だから、世の救世主の母が愛欲にふけるとは！

10. 王侯の宮殿にある宝篋（について言えば）

宝物こそ最勝の丈夫であり、宝篋こそ、勝者の母なのである。

大目犍連よ！ 菩薩がたづね探したとき、王都ディーパバティに於て、
〔200〕アルチマット王の王妃であるスディーパーが、慈悲深く、出身もよく、
身体に汚れなく、感情は温和で、短命で、即ち、彼女の余命は十ヵ月と七夜が
残されていることを見られた。

11. ³³（菩薩が）世間を照覧されたとき、その時、アルチマット王の宮廷で
不死の女、電光とも似た婦人、スディーパー（妃）を見た。

12. 菩薩は彼女を母と知覚して、神がみに言う。「私は下生するであろう。
天と人の至福のために、最後（身）として、胎の住居に入る。」

13. ³⁴天衆は虚心合掌をし、美しい装身具で身を飾り、菩薩に言った。
「最勝のお方よ！ 美わしい有徳の方よ！ あなたの誓願に成就あれ。

14. 私たちもまた、救世のために（また）心ひかれる愛欲を捨てて、
あなたを讃えて、天より勝れたお方よ！ 人間の世界に住むでしょう。」

15. 彼等は無垢で、輝く、美しい曼荼羅樹の花の雨を空から
歓びに躍りあがらん心をもって降らし、清らかに、優しいことばを述べた。

16. 「不死の住居は平静で、心ひかれ、悲しみも苦悩もともになく、
それをあなたは喜ばず、愛欲にも耽らない。誠にそれは稀有のこと。

17. 天衆に勝り、紫金山のように輝き、
スラ（神）なる君は十方（世界）を照したまう。³⁶ 誠にそれは稀有のこと。
18. 天衆、大自在たるダーナナ神、魔神衆、空をかける星群にまさり、
無量知を有したまうこと、誠にそれは稀有のこと。
19. 私たちはあなたとお別れすることを願いましょうか？ すべてのものの師
よ！
〔201〕誠に、蓮華の眼をお持ちのお方あなたは、人・天の依止となられ
るでしょう」
20. かくて、下生のその時には、清浄な百葉の蓮華のような眼であった
慶ぶ天衆は、あらゆる方向に大声をあげた。
21. これはトウシタの町であった話である。一方、無比のスディーパー妃は、
（彼女は）アルチマツ王の妃であるが、王の許に近づいて言った。
22. ³⁷ 彼女は子鹿のような眼をして
清らかな乾闥婆神の妻にも似て、³⁸ 黒ずんだ顔つきで
スディーパー妃は、アルチマツ王に言葉巧みに、³⁹ とても優しく語りかけ
た。
23. 友とともに、腕に宝石を飾り、最上の衣服を身につけ、
「大王よ！ 今宵は王とお身別れして、夜を過ごしとうございます。

註 （註番号直後の数字は Mv.原典のページ、行数を示す。）

- 1 Mahāvastu を「大事」と訳すことについて、霊友会図書室長 湯山 明氏が、異論を述べておられる。「律蔵と深い関係をもって成立した典籍であることを考えれば、Mahāvastu なる語は、Vinaya-vastu や Mahā-varga (Pali /°vagga) と関連して理解すべきものであろう。『大事』とか『大いな

る出来事』との意に解するのは、当を得ていないと思われる。」と（（）名著普及会、名著通信、No. 12、'77-9）。訳例を示されていないので是非の言いようがない。Mv. i. 2. 13, ~14. に有名な文がある。

“ārya-Mahāsāṃghikānām Lokōttaravādinām Madhya-desikānām pāṭhena vinaya-piṭakasya Mahāvastu ye ādi.”

「中国地方の聖大衆部の説出世部の伝承による律蔵に属する Mahāvastu のはじめ。」

確かに Mahāvastu は「律蔵中の一部」であることを、この典籍自身が認めている。しかし、Mahāvastu は、律自体についても、その義釈らしいものはどこにもない。あるいは、あったものが、散逸したのかも知れない。しかし全体としては、話の重複やらスジの散乱はあるが、各品一つ一つは整っている。もし、律蔵としてなら、このようにわが釈迦牟尼は偉大であられた「証左」として、くさぐさの物語りがあり、この偉大な人が定められた権威ある律である旨を理解できる avadāna⇒律への導入部分が、各漢訳や Pali 蔵 vinaya に見られるようになってはならない。第一に Mv. iii. 以下か、各 avadāna の終りかで律自体か、義釈らしいものの本文がある筈である。しかし、Mv. iii. 461. 13. には「聖大衆部の説出世部の伝承による Mahāvastu avadāna は終る」(iti ārya-Mahāsāṃghikānām Lokōttaravādinām pāṭhena iti śrī-mahāvastu-avadānam samāptam Mv. iii. 461. 13. ~14.) とあって、これで終りであることを明示しつつ、当初にあった「律蔵に属する」(vinaya-piṭakasya) という形容詞すらもうないのである。これで終りであって「律」はない。第二には、先述のように、律への導入部分がないことから考えると、「律部分」とそれへの導入部分が散逸したという仮定は、全く無理と言わねばならない。恐らく、その部分は当初から無かったのであろう。

従って私は、説出世部の律蔵の「莊嚴部分」の態をとりながら、独立した仏伝書となっているのが、本書の内容であるというべきではないかと思う。Mahāvastu が Lalitavistara, Buddhacarita に橋を渡す独立した仏伝文学の嚆矢とするのも、この事情からであろうと思われる。本書が巻頭で、「律蔵に属する」という形容詞をつけられていることを、ことさらに、誇張することとは、却って実態を見損うことにならないであろうか。具体的にその内容は

どうかと、事実をありのままに見た方がよいと思う。vastu は「律の主題」であり、「主題に関する事件」であることは承知しつつも、私はなお、mahā-vastu を「大事」、「大いなる出来事」の意味にとって、不都合はないと思う。

2 四洲の名は、Mvy. 3047、3050、3054、3057. にそれぞれ東南西北の順にある。

3 paura-jānapada Laṅk. 251. 3. 大. No 671. 入楞伽經卷第八、vol. 16. 563^a「国土聚落」とある。

4 cf. Mvy. 1685

5 Lal. 17. ~20. (梵文引用省略)

「転輪聖王は、いかなる種類の居士宝を具足しているのか？ 実に聖王には灌頂をうけたクシャトリヤ族の、先述のような居士寶が生ずるのである。学識あり、智慧深く、聡明で、天眼をもつものである。彼はその天眼によって、ヨージアナ四方を、所有主がある伏蔵された財寶を見出し、所有主がない伏蔵された財寶を見出す。所有主のないものを、彼は転輪聖王の財寶とする。転輪聖王は、かくの如き居士寶を具足しているのである。」

以上のような、居士寶についての説明があるが、DN. ii. 176. 6. ~177. 2. にも、同様の趣旨の説明が読みとれる。Pali の gaha-pati は setṭhi, śreṣṭhin と対応する語である。しかし、Egerton は “capitalist would be better” とまで言っているが、これは正確な表現ではないと思う。śreṣṭhin は、「長者、商主、聚落主」と漢訳され、gr̥ha-pati は「長者、居士」と訳されているものである。Mahāvastu の構成をはじめ、他經典との比較、成立年代について、ふれてもいないのに断定的なことは言われないが、この書が成立したであろうと思われる頃に、capitalist の存在を想定することは、とてもできることではない。Egerton は「大金持」という意に使ったのであろうか。前述の Lal. と DN. の説明からすればそれでも不正確な表現である。

要は、Lal. と DN. の文で推察されるそのような「居士という寶」の意で

ある。

- 6 王に関するこの種の記述が Pali 蔵にある。但し Mahāvastu, Dipaṃkara-
vastu との情景設定が異なるから、多少の相違があるが、その符合しているさ
まは以下の通りである。

DN. i. 88. 32. ~89. 7.

Sace agāraṃ ajjhāvasati rājā hoti cakkavatti dhammiko dhamma-rājā
cāturanto vijitāvī janapadatthāvariyaṃ appatto satta-ratana-samannāgato.
Tass’ imāni satta ratanāni bhavanti: seyyathidaṃ cakka-ratanaṃ hatthi-
ratanaṃ assa-ratanaṃ maṇi-ratanaṃ itthi-ratanaṃ gahapati-ratanaṃ
pariṇāyaka-ratanaṃ eva sattamam. Paro sahaṣṣaṃ kho paṇ’ assa puttā
bhavanti sūrā virāṅga-rūpā parasenappamaddanā. So imaṃ pathaviṃ
sāgara-pariyantaṃ adaṇḍena asatthena dhammena abhivijīya ajjhāvasati.

なお、これ以外に DN ii. 16. 13. ~22. 及び Sn. 106. 9. ~18. に、母音の長
短程度の相違はあるか、全く同文がある。Lal. に、この種の表現を期待して
いたが、まだ、発見できないでいる。これと類似した漢訳は、大. No. 190 仏
本行集経卷第三 vol. 3. 664^b. 大. No. 1428 四分律卷三十一 vol. 22. 779^b な
どに見られる。

- 7 以下段落に到るまでの表現について、殊に dharmenemāṃ は、あまりあり
そうでないと Senart は言う。

文頭の So imāṃ …の imāṃ が、また、相当長い間、離れるので、もう一
度、付加的につけ加えられたものと見れば、このままでもよい。もし、校訂
するなら、註で Senart が言うように dharmenāṃ とするか、Mvy. 3636
(7)のように imāṃ を削除の方がよいと思う。

- 8 Pali 蔵、DN. ii. xvii. Mahā-Sudassana-Suttanta、170. 1. ~5.

a { -Mv. Arcimato … rājño Dipavati nāma rājadhāni abhūsi.
-DN. Rañño … Mahā-sudassanassa ayaṃ Kusinārā Kusāvati nāma
rājadhāni ahosi.

- b { -Mv. dvādaśa yojanāni āyāmena purastimena ca paścimena ca, sapta
yojanāni vistārena dakṣiṇena ca uttareṇa ca.
-DN. pacchimena ca puratthimena ca dvādasa yojanāni ahosi āyā-
mena, uttareṇa ca dakkhiṇena ca satta-yojanāni vitthārena.

a の文例では梵、パは全く一致している。

b では、次のような構文の違いがある。

梵文の語順＝（長さ）、（何が）、（どの方向で）

パーリ文の語順＝（どの方向で）、（長さ）、（何が）

- 9 Dipavati に関する記述は、密教文化誌No.130、'79、IVの拙稿、「転輪聖王の王都の記述について」を参照。

- 10 この試訳の後に続く「musāragalva の語意について」の拙稿を参照。

- 11 ここの対句を作表すると次のようである。

sauvarṇasya tāla-skandhasya rūpya-mayaṃ patraṃ ca phalaṃ ca abhūṣi

rūpya-mayasya	id.	muktāyā	patrā ca phalā ca abhūṣi
muktā-mayasya	id.	vaiḍūrya-mayā	id.
vaiḍūrya-mayasya	id.	sphaṭikasya	id.
sphaṭika-mayasya	id.	musāragalva-mayā	id.
musāragalva-mayasya	id.	lohitikā-mayā	id.
lohitikā-mayasya	id.	muktā-mayā	id.

アンダーライン部の語尾は単数形が使われている。大勢は当然、複数形が使われているのにである。どの写本も、特別に異読はないようである。単が複にも代用されていることに注目する。

- 12 Senart は i. 528. のnoteで evam eva teṣāṃ tāla-skandhānāṃ vāteritānāṃ を欠落部に補訂する旨、述べているがその通りであると思う。

13 194. 16. śuṇḍā-peyā であるが、Mahāvastu には、三カ所使われているので、写本と対比すると

	i. 194. 16.	
Senart 校訂文	śuṇḍā-peyā	
B. 写本	śaṇḍā-yeya	
C. 写本	śaṇḍā-peyā	
	iii. 227. 3.	iii. 232. 1.
Senart 校訂文	soṇḍā-manuṣyā-peyā	śuṇḍā-manuṣyā-peyā
B. 写本	saṇḍā-manuṣyā-yeyā	
M. 写本	saundā-manuṣya peyāla	sudānāma manuṣyā-yeyā

Edgerton はその BHSD の śaṇḍā-peya の項で有財釈とすべきであると言っている。śaṇḍā-peyā は主語 manuṣyā の形容詞となるものである。śaṇḍā は śuṇḍā (アルコール度の高い酒) の恐らく誤読であろうと Böhtlingk, Williams も、共にその辞典で指摘している。また、形容詞合成語の後分としてのみ使われるとも、Böhtlingk は述べている。Edgerton は、未来受動分詞の -peya をもって“飲む酒がある”の意にしようとしたのか、その BHSD の śaṇḍā-peya の項で、“Bhvr. lit. having liquor as beverage, drinker of liquor”としている。

さて、全体として文脈から想定されることは“酔うことを希っている、望んでいる”という意の形容詞が適当である。

Senart は i.528. の note で -peya を形容詞として使うことは無理だと言っている。

校訂は誠に困難な条件下にある。

私は、DN. ii. xvii. Mahā-Sudassana-Suttanta の類似した情景描写の一句に Ye kho pan' Ānanda tena samayena Kusāvatīyā rājadhāniyā dhuttā ahesuṃ soṇḍa pipāsā, (DN ii. 172. 4. ~5.) があることに注目し、 $\sqrt{pā}$ の Desiderative ppp. を採り、śuṇḍā-pipāsā と読む。

14 194. 17. pravīcāreṇsu について、Edgerton は BHSD, parīcārayati の項で、法華經における用例を多く引用し、写本 B の読みを採り、parīcāreṇsu

と校訂している。

ここで写本を参照すると

BC °kridetsu rametsu paricārensu

B °retsu

C °retsuh

多く写本が、動詞は $\sqrt{\text{car}}$ を用うとしても、その prefix として pari- を使用しているのに、どうして Senart だけが pra-vi- を使ったのか疑問に思う。pra-vi-cārensu として °cārayati を想わせる語形としている。この際、°cārayati は当然、Non-Caus. である。従って、語意として、prefix に pari- が適当か、Senart の pra-vi- がよいかと言うことである。pari-cārayati=pw. sich umherbewegen, umherwandeln, umwandeln (mit Acc.) ; Will. to move or walk about, go round (acc.), circumambulate の意であり、pra-vi-carati=pw. vorschreiten, vorwärts gehen, Caus. untersuchen, prüfen; Will. to go forwards, advance, to roam about, to walk or wander through (acc.) Caus. examine, investigate accurately ; であることから写本のように pari- $\sqrt{\text{car}}$ がよい。語尾はこの稿の動詞語尾一覧に付した願望法語尾の -etsu(h), -ensu(h) についてと題した小論の結論から、Edgerton の paricāretsu(h) を支持する。これは言うまでもなく、Aorist に代用された願望法語尾である。

15 194. 18.—195. 15. の諸語について

vedika-jāla: Senart は des balustrades à jour だといい (i. 529)、Jones はテラスの意味から、欄杆付きのテラスとなり、ついで欄杆そのものを意味するようになったと (JMv. i. 153. Note)。Edgerton は vedika を railing だとし (BHSD)、Mvy. 5586. では lan-kan-gyi dra-ba と蔵訳されている。lan-kan は中国語の欄杆の音訳であろう。Das は lan-kan を lan-khan と綴り railing, fence, enclosures の語義を与え、dra-ba は net-work としている。Senart は Turnour の註釈付きの Buddhavaṃsa の一部を参照して「城壁の軒蛇腹に支えられている格子」(réseaux suspendus aux corniches des murailles; i. 529.) とも言っている。Buddhavaṃsa I.

14. に次の śloka がある。

Tulāsaṅghāṭānuvaggā sovaṇṇaphalak' atthata
vedikā sabbasoṇṇā d-ubhatopassesu nimmitā.

私訳

樑を組合せた望楼は黄金の板を張り

悉く黄金造りの欄杆が両側に設けられていた。

中国文化の影響をうけていたわれわれには欄杆は身近かでよく判る。結局 vedika-jāla とは、地中に埋めこんだ支柱に横棧を組みこんだもののだと考えるのが常識的であろうと思う。M. Beal が訳した仏本行集経の Cakravartin の王都に相当する所は、大. vol. 3. 660^a 以下が詳細である。

194. 19. varṇa について Senart は、employé comme équivalent de ratna (i. 529. Note) と指摘しているが、同感である。

194. 20. pādaka: 「欄杆の支柱 (pilier)」と Senart は言い、Edgerton は BHSD で「欄杆の垂直の支柱」と言っている。

194. 20. sūeika: 「支柱つまり pādaka を結合する横木 (les barres)」と Senart (i. 529. Note)、Edgerton も横木 (transverse bar) BHSD, Jones は Pali の sūci (小さな門) (JMv. 153. Note): 要は pādaka を結びつける横木のことを言っている。

195. 1. ālambana: Senart は balustrade の支柱: Edgerton 横棧 (one of the cross-pieces of a balustrade): Jones Pali id. :ここでは、細い横木、横棧にあたる。

195. 1. adhiṣṭhāna: Senart は M. Beal の訳を引用して "look-out places" (＝哨所?) とし: Edgerton は Acharya, Diet. Hindu Arch. によって、その BHSD で、建物の基部、基礎、柱のねもと: Jones は A.K. Coomaraswamy: Indian Architectural Terms は、柱脚だとしていると紹介しているが、詳細は不明 (JMv. 153. Note)。

私は原訂者の意見に賛同できない。やはり、これは基部、基礎である。

195. 5. hema-jāla: Senart は balustrade の装飾のようなもので、貴重な材料からなる格子、欄杆と思っているようで、彼の指摘するように、本来、金の網を意味する hema-jāla が、銀のそれと言うのは疑問があるし、hema

密
教
文
化

は、第一義的な（金という）力を失っているとも言っている。同意できる説明である。（i. 530）

195. 10. vyamôtsamga: Senart, utsamga は屋根に関することだと言い; Jones, vyāma は、対角線、斜めを意味し、utsamga は屋根であろう、恐らく意味は「傾斜した二面あるいは斜線の屋根かアーチ」と言うのだとし; Edgerton, 城門の覆いか正面に関するもの、しかし、utsaṅga は、垂直でなく水平の覆いを言い、門の中か、まわりの凹みのようなもののようだ、巾は vyāma（ひろ）で測られたものであろうと言う。（BHSD 同項）。

vyāma については写本では、C本だけであるが、vyāmonsamgā としているのを見ると Senart の校訂を是認しなければならない。Jones は pw の Quere の意を推している。しかし、vyāma はやはり同じ pw の das Maass der ausgespannten Arme, Klawer, の意であり、Will. によっても the measure of the two extended arms とする。Mvy. は mdom 又は hdom とするが、Das によれば同じく a fathom である。

utsaṅga は PW によると、その実例は saudhōtsaṅga, grhōtsaṅga がある。ともに utsaṅga は「屋根」の意に用いられている。Will. もその辞典で any horizontal area or level (as a roof of a house &c) としている。従って、Senart の言うように屋根に関することであろう。従って、Edgerton の説には賛同し難い。Mvy. 6757. utasṅga=pañ-pa, 8012. utsaṅga=pañ-sten, 8013. mahōtsaṅga=pañ-sten chen-po, であり、pañ は人体の胸より下部のふくらみであり、あるいは曲りである。sten は上部とか、頂上の意である。建物の上部の曲りとなれば、処詮、屋根のこであろう。

今は、「奥行一ひろの出しかけ」とした。後日の検討に待ちたい。

195. 12. anuvarga: vedika-jāla の項の śloka 参照。南伝の訳者は、anuvagga=anurūpa として見られているようである。Andersen & Smith の辞典がそのように解している。しかし、ここでは anuvarga が形容詞であっては dvinnām varṇānām anuvarga abunsuḥ suvarṇasya ca rūpyasya ca. という文が成立しない。

anuvarga は他の写本にも支持されているようである。文の主語で、具体物を意味する名詞又は最少限、他品詞の派生語であっても、具体物を標示する

名詞相当語でなくてはならない。

Senart: “anuvarga は恐らく側面の構造物を意味し、(M. Beal の *Romantic Legend* にある) 中国詩の enemy-resisting towers に関連するアクセサリー” だとしている。(i. 530. Note)

Jones: $\sqrt{vrj}$ の Caus. から類推して “keeping-off (towers)” だとしている。(JMv. 154. Note)

Edgerton: “建物の一部” だとしている。(BHSD 同項) prefix anu- が $\sqrt{vrj}$ に前綴された語は見出せないが $\sqrt{vrj}$ から類推せざるを得ないし、基本的には Senart, Jones の意見に私は近い。しかし、漢訳 (大.No. 190. 仏本行集経巻第二、vol. 3. 660^a) の言う「却敵楼櫓」がよいかどうかは私には判らない。仮りに「望楼」と訳した。

195. 12. phatika-phalaka: Senart, 全く手を焼いて、ことばの正確な意味を決定づけられないでいると言っている。Jones; phatika=sphatika とし、phalaka は「板」を意味し、(s)phatika は(建物などの)「翼」「そで」で、*Romantic Legend* に言う、所謂 “white silver panels” に関する何かであり、sphatika は「水晶」で「水晶の板」を思わせるが、「金製の」或は「銀製の」sphatika-phalakāni とは合致しないとも言っている。(JMv. 154. Note)

Edgerton, Mv. ii. 379. 5. の写本 B. phalikhamtu jo accehati, C. phalikhamtu bhujo accehati, Mv. iii. 228. 9. phalikaphalakāni, BM °phalikhahala-sāritu abhūnsuḥ, M. °śālitu abhūtsu, Śikṣāsamuccaya 303. 3 (Vaidya Ed. 159. 2.) parigha-bhujo accehambhī とあるうち、Skt. parigha = AMg. phaliha (Pischel 151. § 208.) を導き、彼自身が、実例から帰納した「語末の有声子音もありうる」という観点から、phalikha を推論し(写本 B, C)、phalikha=Skt. parigha であるとしている。語形論から、Edgerton の考えは充分首肯できるし、語意からしても、上記二者の説明よりもっと合理的であると思う。

今は Edgerton の BHSD phalikha の項の所説に依拠する以外、より以上合理的な私の考えはまだない。

195. 14. paṭimodakā 各写本及び Edgerton の校訂を比較すると次の通り。

i. 195. 14.	paṭimodakā	写本 BC. paṭimokā
ii. 453. 17.	danta-patimokāni	śuṇḍā-patimokāni
写本 C.	danta-parikarmokāni	śuṇḍā-patimokāni
写本 B.	danta-patikemokāni	śuṇḍā-patimokāni
iii. 228. 7.	pratimodakā	写本 M. id.

写本のなかで -moka が多数派であるという意味ではなく、prati- $\sqrt{\text{mud}}$ からは、語脈にかなう具体物を示す派生語はない。Senart は prati- $\sqrt{\text{mud}}$ から派生語を想定しているが (i. 530. Note)、どうしても、前後の文脈からして王都の城門に関する具体物を示すものでなくてはならない。従って -modaka ではない。これは城門に附属する物を意味するような方向の語でなくてはならない。上記写本のいずれにも見られる patimoka の pati は paṭi と通じるものであり、pratimoka を pw. で確認した。この語意は語脈に合致する。従って、いわば by the merest chance としか言いようのない偶然から達した結論は Edgerton の所説と一致した。ここは pati-ではなく paṭimokā と読む。(cf. BHSD paṭimoka) 「飾り」のことである。

195. 15. elūkā: Mahāvastu に用いられているのは四カ所あって、これを①とすると、まず、

① Senart elūkā, 写本 BC valakā:

② ii. 486. 4. ~5. Senart elukām, 写本 B id.

③ iii. 20. 9. ~10. Senart elūkam (2カ所)、写本 BC elukam (2カ所):

④ iii. 228. 11. Senart elūkā, 写本 M elukā, B elūka であって、②. ③ともに文脈からすると、Senart が註するように、temple à reliques と見てよいと思う。然し、①と④は、呼びかけの対象者が、大目犍連から阿難に、abhunsuḥ が abhūsi に変わっているだけで、elūkā については前後の文脈、情景描写からして同一物を指していることは明瞭である。

Ratnachandra の辞典及び PTSD によれば、Skt. eluka=AMg. eluya=Pali **elaka** である。eluka について PW 及び pw は薬草、Will. は香料の意を与えているが、ともに医書 Suśruta が出典で、今、註記しようとしている eluka は、この語意ではない。

Pischel 168. 240. AMg. elaya = eḍaka であって、引用の Uttarajjhayana-

sutta, Pannavana, Ovavaiyasutta を見ていないが、goat, ram の意であろう。従ってこれも、上記の①、④に適用すべき語意ではない。

Ratnachandra; Skt. eluka, a threshold of a door: PTSD; a threshold とし、Skt. は記されていない。語形と語意は uncertain としている。このことについて “wrongly queried in PTSD” としつつ、Edgerton 自身は a threshold の語意を確認しているようである。Jones は Senart の i. 530. Note の意見を容れて elūkā = eḍūka で、“shrines for relics” と訳している。

私は前記①と④については、Ratnachandra と PTSD の語意が適当と思う。語形は語脈からして、dual であるが、pl. 形を代用させて elūkā と読む。因に、Āṅguttara-nikāya i. 295. 11. ~13 ff. と ii. 206. 10. ~11 ff. に **eḷaka-**を含む同じ文章がある。次の通り。So na kumbhi-mukhā paṭigaṇhāti na kaḷopi-mukhā paṭigaṇhāti na eḷakamantaram na daṇḍamantaram ... (eḷaka の variant reading の註記はない。)(彼はかめの口より施食を受けず、鍋の口より施食を受けず、敷居を隔てて施食を受けず、杖を隔てて施食を受けず……)

この elaka は「敷居」と考えてよいと思う。

16 196. 1. iṣikāni: Mvy. 7048. “iṣikā mapitā bhavanti (Tib. śin-rtags btsugs、漢 立記) とある。

Pali では Āṅguttara IV. 106. 2. 及び 109. 13. に esikā の語形で用いられている。他のテキストでは、esikatthāyin (柱のようにガッチリして) の意の合成語として用いられている。

17 196. 2. parigohyāni: Senart の読み方では pari- $\sqrt{\text{guh}}$ を想定しなくてはならない。pari- $\sqrt{\text{guh}}$ では少し意味がそれてくる。文脈からすれば、王城の門前に建てられている柱の周囲の長さを言っている筈である。i. 531. の註によれば、原訂者も迷っている。Jones は JMv. 154. の Note で “抱く” という意の upa- $\sqrt{\text{guh}}$ から類推して Senart はこの解釈を証拠だてているだけだと言っている。全く同感である。

Edgerton は BHSD の parigohya の項で周囲の意だとしながら、積極的にその用例を示してはいない。私見では、prefix としては pari- が適当と思う。語根は guh では pari- $\sqrt{\text{guh}}$ に周囲という意の用例がない。しかし、写本は二本とも $\sqrt{\text{guh}}$ を用いて、C gohyāni, B pārigoḥyāni とある。恐らく、pari- $\sqrt{\text{guh}}$ を今は認めざるを得ないであろう。私は、pari- $\sqrt{\text{grh}}$ の derivative ではなかろうかとも思う。しかし、写本の方角は無視できない。碩学 Senart も迷い、私も不明を恥じる。結論は出ない。今後の研究に待ちたい。

18 196. 9. i. 531. の Note により tad-yathāpi nāma paṃcāṃgikasya tūryasya を欠落部に挿入。

19 196. 12. sayyathā: Pali seyyathā

20 196. 14. ~15. śramaṇa-brāhmaṇeṣu bhadram astu vaḥ: PW には、bhadramte や bhadram vaḥ が話中で挨拶の語として、よく挿入されるとある。と同時に、ここでは単なる Höflichkeitsformeln の bhadram を astu の Acc. としても、共用させているものとして訳した。

21 196. 15. valguyā: Senart も Note で指摘するように、又 Edgerton も BHSD の valguyā と yaṣṭi の項で、疑問を投げかけている。しかし、写本は何らの異った読み方も記していない。

22 196. 18. abhiniveśa: 恩師白石（藤田）真道先生は i. 61. 1. ~2. parinirvṛtasya ca stūpaṃ kāritaṃ yojanam uccatvena yojanam abhiniveśena =und (für welchen)、als er ins Nirvāṇa eingegangen war, (von mir) ein Stūpa gebaut worden ist von Yojana-Höhe und Yojanagrundriß … (山梨大学学芸学部紀要Ⅱ、17. 1957)

高さについては、i. 61. 1. と196. 17. では uccatva, iii. 229. 14. と332. 10. ではudvedha が使われている。PW ではどの用例も執着の意に用いられている。又、漢訳では、それぞれ「高」、「厚」と訳され意に適っている。

Edgerton は BHSD の abhiniveśa の項で、"uceatva 又は udvedha と対照的に、直径（水平的な）長さか、幅のいずれか" だとして、i. 61. 2 ; 196. 18 ; iii. 229. 14 ; 232. 11. を例示しているが、abhiniveśa は地下に埋まった部分のことである。Edgerton の説は首肯できない。

23 196. 20. akṣudrāvakaśa: Edgerton は BHSD のその項で、これは読み方の誤りであろう、もし読み方が正しいのなら、それは視野、視界、行動半径、機会が小さくない意だとしている。

Mahāvastu の中で、この語が使われているのは i. 196. 20 ; 197. 16 ; 352. 15 ; ii. 421. 19 ; 422. 7 ; 432. 14 ; iii. 35. 18 ; 153. 16 ; 218. 10. 15 ; 377. 12 ; 404. 17. に於てである。それらは皆、「物腰態度が気高い」、「上品で、下卑ではない」、「美しく、高貴な」と言う語意である。さらに、Edgerton は読み方の誤りだというのが、DN i. 114. 6 ; 115. 22 ; 120. 21 ; 123. 11. と M ii. Cankisuttam 165. 31 ; 167. 1. に Pali の相当語である akkhuddāvakaśo が使われている。上記で引用した DN の 4 カ所は総て、Somaṇḍa Sutta からで、それに対応する漢訳は、大正蔵 No. 1. 長阿含経卷十五、(二二) 第三分種徳経第三である。漢訳と対比すると次の通りである。

- | | |
|------------|------------------------------------|
| i. 114. 6. | 顔貌端正 (大. vol. 1. 94 ^e) |
| 115. 22. | 顔貌端正 (同 95 ^a) |
| 120. 21. | 顔貌端正 (同 96 ^a) |
| 123. 11. | 顔貌端正 (同 96 ^b) |

avakaśa から類推した Edgerton の主張の方向は理解できるが、そのまま語意として採用することはためらうのである。

24 197. 1. rimeatha: 蔵訳及び漢訳では「用意する」「準備する」という意に理解されているが、一層、字義に即して「浄化する」「清浄にする」と言う意味に解していると Senart は言う (i. 531. Note)。さらに、この(用意・準備の)訳が、伝統にもとづく典拠ある言葉であるが、適切であるかどうか疑問があるとも言っている。

これは明らかに Senart の誤解である。 $\sqrt{ric}$ には用意、準備、浄化、清浄にする方向の語意は全くない。

$\sqrt{ric}$ 本来の語義は PW の引用に大変、詳細であるし、Mvy. による蔵訳も *hdor-ba* か *spoñ-ba* である。Das も Jäschke もともにその種の語義は少しも与えてはいない。

従って、語義そのものの議論は明らかに Senart の誤解としか言いようがない。

ただ、196. 21. に関連して i. 531. Note で、「物語りの移り変わりに欠落したところがあるし、物語の扱いも雑なものである。」と言う Senart の指摘の方が、私には素直に共感できる。少くとも、この段落は Sudipa 妃のあでやかさを述べていた前節から、突如として、話が極端に移り変わってくる。その唐突さは、全く異質の物語りへの転回であるだけに、何かが欠落しているように思われる。漢訳の方広大莊嚴經（大.No.187）の勝族品第三、法門品第四にいたるようななめらかさは全くない。その点は、Lal. 18. ~19. を漢訳に比べればやはり、なめらかさは劣るが、Mv. に比れば、まだ、自然な推移と言える。

25 197. 4. Lacuna の部分に i. 532. Note によって *eyavane* を補訂する。
—の *metre* が望ましい。これは丁度、その条件を満たすものである。

26 197. 5. *śuddhāvāsa*:

Senart は *maheśvara* を固有名詞だとしているが、このことについて Jones は *maheśvaravara* は浄居天に関する a descriptive title だとしている。そして、原文 i. 224. 3. の *maheśvara* について、JMv. 178. Note で、浄居天全体を *maheśvara* という互換性のある語で、Mv. が表現しているのだと指摘している。

さて、俱舍論卷第八（大.No.1558. vol. 29. 41^a）を基調に置いて天神の名を整理し、Mvy. のとる所も併記すると次のようになる。ただ、天神の名について Edgerton は BHSD *deva* の項で Lal. や Gv. に記述されていることを

紹介している。しかし、ここでは追認の調査はしていない。この一覧を見ると Jones の説が正しいと思う。表中、3000 台の数字は Mvy. のそれである。梵語の綴りは Mvy. によった。

密

Kāma-dhātu	欲界	俱舍論	教
1. 3078. Cātur-mahārāja-kāyikāḥ	四天王種	四大王衆天	文
2. 3079. Trāyāstrimśāḥ	三十三切利天	三十三天	
3. 3080. Yāmāḥ	焰摩天	夜摩天	化
4. 3081. Tuṣitāḥ	具喜天、兜率天	都史多天	
5. 3082. Nirmāṇa-ratayaḥ	化樂天	樂變化天	化
6. 3083. Para-nirmita-vaśa-vartināḥ	他化自在天	他化自在天	

Mvy. には次の二神が記されている。

3076. Bhaumāḥ	地上居
3077. Āntarī(i)kṣa-vāsinaḥ	居虚空

Rūpa-dhātu 色界

I 初禪

1. 3085. Brahma-kāyikāḥ	梵種天	梵衆天
2. 3087. Brahma-purohitāḥ	梵輔天	梵輔天
3. 3088. Mahābrahmāṇaḥ	大梵天	大梵天

Mvy. には次の神が記されている。

3086. Brahma-pāriṣadhyāḥ	梵衆天
--------------------------	-----

II 第二禪

1. 3090. Parittābhāḥ	少光天	少光天
2. 3091. A-pramāṇābhāḥ	無量光天	無量光天
3. 3092. Ābhāsvarāḥ	光音天	極光淨天

III 第三禪

1. 3094. Paritta-śubhāḥ	小淨天	少淨天
2. 3095. Apramāṇa-śubhāḥ	無量淨天	無量淨天
3. 3096. Śubha-kṛtsnāḥ	徧淨天	遍淨天

IV 第四禪

1. 3098. Anabhrakāḥ	無雲天	無雲天
---------------------	-----	-----

2. 3099. Puṇya-prasavāḥ	福生天	福生天
3. 3100. Br̥hat-phalāḥ	広果天	広果天
4. 3102. Avṛhāḥ	無想天	無煩天
5. 3103. A-tapāḥ	無熱天	無熱天
6. 3104. Su-dṛśāḥ	善現(天)	善現天
7. 3105. Su-darśnāḥ	善見天	善見天
8. 3106. Akaniṣṭhāḥ	色究竟(天)	色究竟天

Mvy. には次の二神が記されている。

3107. aghaniṣṭhāḥ 和音

3108. Mahāmaheśvarāyatanam 妙大自在天処

Arūpya-dhātu 無色界

1. 3110. Ākāśānantyāyatanam	空無辺処天	空無辺処
2. 3111. Vijñānānantyāyatanam	識無辺処天	識無辺処
3. 3112. Ākīṃcanyāyatanam	無所有処天	無所有処
4. 3113. Naiva-saṃjñānāsaṃjñāyatanam	無有想非無想処天	非想非非想処

27 197. 5. buddha-śabdaṃ: karma-dhārya と見て「仏という声」と訳した。

28 197. 14. saṣṭhi aṅgehi: 別に小論を以て、この稿の後で比較対照する。

29 198. 17. kata-puṇyo: Edgerton は kata- は kṛta- の誤りだとし、Pali では kata-puñño で、前分が Pali 化したものであろう。他の写本は何も記していない。従って随所に Pali 語形が用いられているので、特に kṛta- に変更しなければならないということもない。

30 199. 10.

divasāni sapta māsā ca daśa tasyā uram otaret

B °māsām ca°

C °māsāni daśa° °otare

BC °udarem ātare

Edgerton は BHSD の ura(s) の項で、後半を tasyodar' otaret と校訂し

ている。つまり、*tasyā* (gen.) *udara* (*udara* の n. Acc. sg.) と見ている訳である。*ava-√tṛ* は Loc. でなく Acc. をとることが通例であるから、*udare* (Loc.) ではなく *udaram* (Acc.) をとると 1 *mātra* 多くなる。これを避けるために、*udara* (Acc.) としたものであろう。Edgerton は、BHSg 8. 13～35で、Mv. の実例を多く挙げているが Pali はもちろん、Prakrit においても、Pischel § 363 の中性の declension で、*vāṭaka[m]* *puvvaḍattam* が一例あるが、形容詞には、*°ḍattam* と Acc. の標示がある。従って、Mv. のこの文が、散文ならぬ詩形とは言え *tasyodar' otaret* でよいであろうか、あいまいさが残るのである。ここは、たしかに unmetrical であるが、*tasyōdaram otaret* と読む。

31 199. 13. *sugata-mātari*: Senart の註 (i. 533.)によって、*mātarō*と読む。また、*pratiṣevyuh* の prefix は *pari-* の方がよい。

32 199. 14. *na pitā*: Senart の註 (i. 533.)によって、*napitā* と読む。

33 200. 3. 一連の *śloka* について、Senart の註のように、Mv. i. 143. 7. 以下のそれとは、同文と言ってよい。固有名詞の違いだけと言ってよい程、酷似している。次のように対応する。

200. 3. ～4. = 143. 7. ～8. 、200. 5. ～6. = 143. 9. ～10. 、200. 7. ～8. = 143. 11. ～12. 、200. 9. ～10. = 143. 13. ～14. 、200. 19. ～20. = 143. 15. ～16. 、

34 200. 7. *deva-saṃgho*: Edgerton は BHSg 8. 24. で *°saṃghā*だと言う。BC 写本も *°saṃghā* である。しかし、metre 上、どちらでも差支えない。また、pl 形としようなら *°ghā* が一般的であろうが、集合名詞のように考えれば、差しつかえない。ここで、Senart は B, C, の写本をもって校訂している。従って、写本が *-o* としているのなら、一応、今は *-o* に従っておく方がよい。

35 i. 200. 9. *osirati*: Mahāvastu に於て使用されている *osira-* (*osira-*、

osara- を含む) 語幹の使用の例を可能な限り採録し、ośira- を Senart の校訂語として13種、その写本から17種、osira- を11種、写本より16種、osara- を13種、写本より13種を得た。この類と数の中には、前接字 ava-, anu- を持つものを含んでいる。

-ś-, -s- の吹気音とその直後の幹母音の関係を見ると、-ś- は幹母音 i を伴い、即ち -śir- となり、-s- は i 又は a で、即ち -sir- 又は -sar- となる。

語義から言えば、Edgerton は BHSD の avaśirati と avasarati の項で (avaśirati は 6 項) 説明している。

採録した語形を調べると、1. ośira-, osira- 2. osara-, 3. その他となる。と言うのは、ośira- と osira- の語意は殆んど同じ意味に使われていて、その差違をつけ難い。従って、今はこの二形を一つのカテゴリーにおさめることとした。

Senart は、この語を $\text{ava-}\sqrt{\text{srj}}$ の派生語と見ているようであるが、語根部の -j- が、どんな条件のもとで消滅するのか、その説明はない。 $\sqrt{\text{srj}}$ の過去分詞 *sr̥ṣṭa* は、Internal Samdhi として合法的であって -j- の消滅の傍証にもならない。私は Senart とは違って、語意論から言えば、多少の不満は残るとしても、 $\text{ava-}\sqrt{\text{sr}}$, $\text{o-}\sqrt{\text{sr}}$ を採る。紙数を憚らず校訂語と写本のそれとを併記すると次のように整理した。その語が使用されている文は、語脈を見るとき、重要なのであるが、それは原文に任せて、省略した。

1. ośirati, osirati

a 追いやる、投げ入れる。

osiranti: L. osiranti, B. osiranti, M. osirenti

b 放つ、発する；投げ下ろす、降らす。

osireyā ii. 315. 6 : C. osireyā

osire ii. 383. 7 : C. ośire

osire iii. 273. 16 : M. ośire

c 自由にする、行かせる；断念する。

ośiritavyam ii. 424. 20 : C. ośiritavyā, B. ośiritavyā

ośiṣṭa ii. 425. 3 : C. ośiriṣṭā, B. ośiṣṭā

ośiritavyaṃ ii. 425.16 : C. ośiritavyā, B. ośiritavyā
 ośiriṣyati ii. 426.7 : 18 : B. osariṣyati, C. ośiriṣyati
 ośiriṣyati ii. 427. 10 : C. ośiriṣyati, B. ośiriṣyasi
 ośiritvā ii. 452.16 : 写本に異読なし。
 ośiriṣyasi ii. 459.15 : BC. osariṣyasi, C. osiriṣyasi
 osireyam iii. 1.4. : B. osareyam, C. osare
 ośirati ii. 426.7 : B. ośiriti, C. ośiriti
 ośirati iii. 1.6 : C. ośiriti
 osirati iii. 2.11 : C. ośirati

密
 教
 文
 化

d 放棄する、断念する、取り去る。

ośiritva i. 143.13 : C. ośirati
 ośiritva i. 200.9 : C. osaritva, B. osaritva
 ośiritva ii. 4.6 : BC. okiritva
 osirāhi ii. 272.13 : C. ośirehi
 ośiritvā ii. 334.22 : C. osiritvā
 ośiritvā ii. 335.4 : 写本に異読なし。
 ośiritva ii. 367.19 : B. osaritva, C. osiritva
 ośiritvāna ii. 367.22 : BC. ośiritvāna,
 osire ii. 393.9 : B. osārapuṣpa, C. osare pu°
 avasirasi iii. 165.12 : 写本に異読なし。

2. osarati

avasāri i. 319.14.16.20.

i. 323.13.16 (16. では写本 BC. anusāri) : ii. 117.20 (B. anusāri) (着く、出る)

avasarim ii. 199. 6. 異読なし : ii.120. 17. BC. avasāri (出発する)

avasarim ii. 123.16. C. avasāri, B. °sārim (去る)

iii. 47.12. M. avasari (へ進む)

osarantasya ii. 108.7.9.10.11. BC. osarantasya (近づく)

osare ii. 222. 1. 異読なし。(近づく)

osaranti i. 13.6. N. osaranti, BA osaranti (入る)

osare iii. 364. 19. 異読なし。(近づく)

osaresi iii. 401. 1. B. orasasa, M. orasasa (きれいにする)

osaranti iii. 453. 3. BM. osanti, M. osaranti (貯える)

3. その他

avasṛjati ii. 344. 15. C. avati, B. avaṣīti

avakire ii. 343. 19. B. okiretsuḥ, C. okiretsu

okiri ii. 349. 16. BC. oṣiri, C. okiri

otaritvā ii. 298. 6. C. oṣiritvā, B. okiritvā

以上のうち、3. その他の項の四語については、当該文にあたって、意見を述べることとする。

36 200. 16. udyotayasi = Skt ud- $\sqrt{\text{dyut}}$ Caus. uddyotayasi

37 201. 6. ～7. の韻文、ことに202. 5. ～6. 以下については、さきの i. 145. 6. (十地品) 以下の韻文と酷示している。多少の固有名詞及びその他の用語とそれに付帯する変化とを勘案すると全く同じと言ってよいほどである。以下にその対照表をあげる。

十地品	燃燈仏事記	十地品	燃燈仏事記
1. 145. 6. ～7.	＝i. 201. 6. ～7.	145. 8. ～9.	＝202. 5. ～6.
145. 10. ～11.	＝202. 7. ～8.	145. 12. ～13.	＝202. 9. ～10.
145. 14. ～15.	＝202. 11. ～12.	145. 16. ～17.	＝202. 13. ～14.
145. 18. ～146. 1.	＝202. 15. ～16.	146. 2. ～3.	＝202. 17. ～18.
146. 4. ～5.	＝202. 19. ～20.	146. 6. ～7.	＝203. 7. ～8.
146. 8. ～9.	＝203. 9. ～10.	146. 10. ～11.	＝203. 11. ～12.
146. 12. ～13.	＝203. 13. ～14.	146. 14. ～147. 1.	＝203. 15. ～16.
147. 2. ～3.	＝203. 17. ～18.	147. 4. ～5.	＝204. 2. ～3.

38 201. 6. śyāmā: 黒ずんだ顔つきと訳したが、これは、美人の相貌の一つであると考えられている。

1. Senart

Mahāvastu i. 490. の note で Childers を引用し「samagga と恰も同義語となっている。考えるに、後日、意味上の発展があつて、同意、一致という観念に関するものとなっている。この語は本来、「歡心を買う」、「やさしい」、「愛らしい」を意味する」と言っている。

密
教
文
化

2. J. Jones

直訳的には「to the point」で「consistent」「sensible」「to the point」と言う意味で、Pali 語の用法から説明されるべきだとしながら、最終的には、「Mahāvastu では、この語はある特定の場合に、夫に対する妃の応対の話のなかでのきまり文句 (cliché) である」と。そして、persuasively の訳を与えている。

3. Edgerton

話ぶりに関することで、「connected」「coherent」「sensible」の意だとする。又、「agreeable」「kindly」だとする Senart の意見は誤りだとしている

4. 白石真道教授

i. 145. 6. ~7. の独訳で、「bündig」「verbindlich」と訳しておられる。

5. その他

a) Mvy. 474. sahitā = ḥbrel-ba 漢 相連、利益とあり、ことに、榊博士は「利益ある (sa + hita) の解釈は不可なり」と解説しておられる。

b) 萩原辞典

梵漢対訳仏教辞典では「利益 (有益)」とし、梵和大辞典の方では、ḥbrel-ba 系統の意味が多く、ほかに、瑜伽師地論からとった「即於爾時」の意が採録されている。

c) Bodhisattva-bhūmi 関係

宇井伯寿博士は、その索引で

dharmaṃ deśayati yuktaiḥ padavyamjanaiḥ sahitair 「適切であり……相応せる文句によって法を示す」(P. 163) と訳され、sahita の項では、次のように註釈をつけられている。

「助伴 (結合せる、適合せる、適切な、saṃhita と同じで、hita は dhā

の過去分詞であるから、saha からの語でなく、助伴ではない」と。

Bodhisattva-bhūmi 321. 11. yasya vihārasyānamtaraṃ sahitam evānuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambudhya sarva-buddha-kāryaṃ karoti
…、(この静住から絶え間なく、この時、実に無上正等覺を悟り、一切の仏の行をなす) 大. No. 1579 瑜伽師地論 住品、vol. 30. 553^o に「從此住無間即於爾時證覺無上正等菩提。能作一切仏所作事。」とある。

d) Saddharma-puṇḍarīka

sahitaṃ ca bhūtaṃ ca sadā prabhāṣate māsānyī catvāri athāpi varṣaṃ
(Kern & Nanjio Ed. 373. 4.)

「また、四カ月でも、一年でも、常に、空疎でないことと真実とを話すのである」

大. No. 262 妙法蓮華經卷第六 vol. 9. 50^b

次第如法説 月四月至歲

大. No. 263 正法華經卷第九 vol. 9. 122^b

一月四月 若至一年 所説善惡 不違至誠

大. No. 264 添品妙法蓮華經卷第六 vol. 9. 184^b

次第如法説 月四月至歲

とある。

e) 鈴木大拙博士：楞伽經索引 P. 184

俱、共、 ḥḍus-pa

f) 梵文八千頌般若積索引(真野龍海氏編)、An Index to the Bodhicāryāvatāra pañjikā, chap. IX (平野 隆氏編)もともに、beas-pa としている。

e) の ḥḍus-pa も beas-pa もともに、ḥbrel-ba 系の語意である。

従って、5 その他の項で見た諸訳の語意は一般的に使用例の多い多数派であるが、いみじくも、Jones が IMv. i. 115. note で “at this particular juncture” と言ったように、ここでは、多数派の語意では通じない。Jones 及び白石先生の訳語を参照させて頂いた。

お詫び

略号表は次号に於て掲出します。